

「ウーマン・イン・モーション」 メラニー・ロラン

2022 年 5 月 23 日

リシャール・ジャリオ

皆さん、こんにちは。マダム・フィガロのジャーナリスト、リシャール・ジャリオです。フランス語による 2 回目の「ウーマン・イン・モーション」トークへようこそ。「ウーマン・イン・モーション」はケリングがパートナーシップを結ぶカンヌ映画祭で開始したプログラムで、文化や芸術の世界における女性の活躍や立場に光を当てることを目的としています。今年のヴィオラ・デイヴィスのように、象徴的な人物だけでなく、新進の若き才能も表彰しています。今年メラニー・ロランが(トークに)選ばれたのは、彼女の監督としての取り組みが、女性であるという条件と共鳴しているように感じられるからです。2007 年に『Je vais bien, ne t'en fais pas』で女優として鮮烈なデビューを飾ったことが記憶にまだ新しいですが、デビュー作でセザール賞新人女優賞を受賞し、その 2 年後にはタランティーノ作品『イングロリアス・バスターズ』に出演し、ハリウッド進出を果たしました。2011 年には、初の監督作品『Les adoptés』を発表し、その後、シシル・ディオンの共同監督作『TOMORROW パーマネントライフを探して』など、計 5 作を発表しています。『TOMORROW パーマネントライフを探して』は環境への取り組みをテーマとし、二人はセザール賞(最優秀ドキュメンタリー部門)を受賞しました。最新作の『社会から虐げられた女たち』は、19 世紀の女性の境遇を訴えましたが、それは現代にも響く内容です。この後登場するメラニーさんに、この作品についても聞いてみたいと思います。では、よろしくお願いいたします。

ただ今より、ケリングの「ウーマン・イン・モーション」トークをメラニー・ロランさんと一緒にはじめます。

メラニーさん、今日はありがとうございます。お迎えできてうれしいです。さて、ご自身は女優、監督、ドキュメンタリー作家、活動家、そして時に歌手としての顔もお持ちですが、どれがあなたなのでしょうか。ご自身を何と定義されますか？

メラニー・ロラン

自分自身を定義する必要があるかしら(笑)

リシャール・ジャリオ

必ずしもそうではないですが、どれが一番感覚として近いでしょうか？役者として、そして今は監督としていくつもの人生を歩まれています。

メラニー・ロラン

そうですね。いつも色々(感性を)混ぜて使っています。歌でも映画でも、カメラの前でも後ろでも、同じことを伝えるのに新しいベクトルを使って、ある一つの芸術を完成させる、つまり物語を伝えるような感じです。

アーティストに色々なことをやりたいと押し付けるのは簡単なことではありませんし、なかなか受け入れられるものではありませんが、私は早い段階で度胸がついて、それに慣れたのだと思います。

リシャール・ジャンリオ

この折衷主義は、実際のところ、時に不当な批判を受けることもあります。女性は何をするにしても、常に自分を正当化しなければならないという印象がありますが、それについてどのようにお考えですか？

メラニー・ロラン

色々なことをやろうと思う女性に対して、優しさが足りないと感じます。女性は批判され、嫌われることがより多くあると思います。女性に対して残酷なことがより多くあります。女性同士でもそうですし、女性に対してもです。そう思います。ですから毎日が大変なんです。

リシャール・ジャンリオ

さて、ここで少しご自身のキャリアに話を戻しますが、映画をやりたいという欲求や、どのようにして映画界に入り、映画の仕事に就くことになったのでしょうか。

メラニー・ロラン

子どもの頃の自分のビデオを見返すと、いつもプリンセスのドレスを着ていました。カンヌに来る準備をしていたのかもしれませんが(笑)いつもおしゃれをしていました。演じること、物語を書くこと、作ることが好きでした。芸術家の家系で育ち、祖母がたくさん話を読み聞かせてくれ、そのシーンに私はいつも入り込んでいました。ですから、かなり早い段階で、そうした気持ちが育ったのだと思います。そして自然に、明るいスポットライトの下にいたいという気持ちと、暗いところで物語を語りたいという気持ちの両方が生まれました。

リシャール・ジャンリオ

小さい頃から書き始めたのですか？

メラニー・ロラン

大して上手なストーリーは書けませんでした。人形遊びではなく、誰かの誕生日に自分のショーを演出することの方に私は熱中していました。友達の多くは今でもその誕生日会のトラウマがあると思いますよ。

リシャール・ジャンリオ

そこからは早かったですね。ジュラル・ドパルデューに見出されたという伝説もおもちです。

メラニー・ロラン

伝説は本当に起こったことです！

リシャール・ジャンリオ

それについてお話いただけますか？

メラニー・ロラン

私が 14 歳の時、『アステリスクとオベリスク』の撮影に行くことになりました。朝 8 時、私は、父親が舞台監督をしている友達と一緒にいて、邪魔にならないように二人ともセットからだいぶ離れたところにいました。そうしたら、オベリスク役のドパルドリュエが現れたんです。私を見下ろすようにして。衣装を着たまま、本物のドパルデュエがそこにいて驚きました。彼は私に、「映画を作りたいの？」と聞きました。それに

対して私は「そうです」と答えました。まだ 14 歳だったからです。その後、彼がフレデリック・オベルタンと初めて共同監督を務め、キャロル・ブーケが主演した作品に出演することになりました。それが初めての出演経験でした。

リシャール・ジャノリオ

感動しましたか？それともわりと簡単に決まったと感じましたか？

メラニー・ロラン

いいえ、まったく簡単なことではありませんでした。映画の上映会の時、緊張のあまり、声がかすれてまったく出ませんでした、こんな風に。

リシャール・ジャノリオ

その時、この仕事を人生で続けていく確信はありましたか？

メラニー・ロラン

いいえ。でも不思議なもので、若さってすぐに何かを信じたかと思えば、すぐに希望を失ってしまうんですよ。非常に早い時期に何かを始めると、かなりすぐに手から放してしまうのです。高校に通っていた頃、映画の選択クラスでは、クラスの皆が映画の仕事をやりたいと思っていました。その時の私は、すでに年に 1、2 本のペースで映画を撮っていました。学校では友達が少なかったですが、学校の外では、映画技術者の友人も多くいました。でも、学校ではそうしたことは喋らずほとんどスパイみたいな生活をしていましたね。本当はもっと共有したかったのですが、まわりには色々と秘密にしていました。あの年齢ではむずかしかったんです。

リシャール・ジャノリオ

思春期は豊かなものだったのでしょうか？それとも孤独だったのでしょうか？

メラニー・ロラン

そうですね。かなり早い時期から大人の環境につかった青春時代を送ることができました。その中でも素晴らしい大人たちと一緒に過ごすことができました。もともと 18 歳同士で皆と集まるよりも、20 歳以上年齢が上の人たちと食事に行き、人生について語るの方が好きでした。その両方ともを経験しましたが、かなり早い段階からいくつもの人生があるように感じていました。でも、わりと素晴らしいものでした。

リシャール・ジャノリオ

その数年後には売れっ子になるわけですが、2010 年代、フランス映画界で自分の居場所は簡単に見つかりましたか？

メラニー・ロラン

2010 年と言うと、まだそんな前ではないですね。そうですね、仕事を始めて 7、8 年経ってから、成功はやってきたという感じですが、とは言っても、悲しみに暮れたり、無駄に打ちのめされたり、役を得るのに激しい競争を感じることも時間や... 転職したいと強く思ったこともありました。キャリアにおいて、疑うことを経験するということは大事なことだと思います。私はいつも若くして、たった 1 本の映画で成功をつかんだ俳優たちに魅力を感じつつ、心配もしていました。若い人たちが、ある種流星のごとく成功する。そしてそれを最後までキープするのは本当に大変なことです。

リチャール・ジャノリオ

ご自身は比較的早くに売れ、その状態を維持していますが、何が必要だと思われますか？タフであることが求められるのでしょうか？

メラニー・ロラン

それには、バランスのとれた素敵な家族が必要だと思いますね。私には素晴らしい家族がいて、本当に助けになっています。

リチャール・ジャノリオ

仕事にも同行してくれましたか？

メラニー・ロラン

いつも一緒にいてくれて、賢くて、楽しい家族です。家族には何でも話せます。何か問題が起きても、それがドラマやヒステリーにならず、正しい方へと導いてくれます。私にはとてもしっかりとした基盤があると実感しています。また、いつまでたっても成功に慣れることはありません。成功とは、とても刹那的なものです。いつ人生が急に終わってしまうかも分からない、と自分に言い聞かせ、常に人生を楽しむことが大切です。私たちのこの並外れた仕事は、命を救うわけでもなく、戦争を知るわけでもなく、物語を語り、人々に夢を与えるのですから。少し離れて物事を見ることです。

リチャール・ジャノリオ

キャスティングは競争の世界だというお話が先ほどありましたが、辛いことはなかったですか？女優として拒絶された経験はありますか？

メラニー・ロラン

キャスティングが人生のすべてだった時期もあったのですが、1個はうまく行って、そして3個うまくいったと思ったら、10個はうまくいかない、というような感じです。みんなですれ違ふ、ちょっとしたゲーム感覚でした。自分がいつか監督になりたいと想像していた頃は、作家性のある映画をたくさん作ったり、美しいシーンで作家性の強い作品を撮る監督と仕事をしたいと思っていました。ですが実際に監督業に移行すると、その思いが少し崩れました。女性監督と仕事をすると、「いやあ、女性監督だと、ちょっと面倒なことになりそうだね。乗っ取られそうだ」というような声をよく耳にしました。企画書でそれを感じることもあり、女性に対して何か誤解されているように感じました。本当にしょっちゅう言われました。

リチャール・ジャノリオ

それに対してどういった反応を示しましたか？

メラニー・ロラン

気づくのに時間がかかりましたね。きちんと気が付いたのは少し前のことです。不思議なことに、何人もの監督兼俳優の人たちと仕事をしましたが、周囲の声をあまり気にしていません。ただ、監督になると、みんなと同じ言葉で話すことになるので、ちょっともどかしいですね。監督でもある俳優というのは、2つの言語を話します。女優として他の監督と仕事をできるようになって、この仕事を始めた頃よりもずっと深く理解できるようになりました。突然、女優が楽屋に閉じこもって、何かに悩んで、ひどく苦しんだりすることがありますが、監督もまた同じです。監督が激怒するのは、監督の世界にいて誰にも理解されないからです。監督経験のある役者は、それがどういうものかを知っているので、より流動的で、少しはうまくいく印象があります。

リシャルル・ジャンリオ

どうして最終的に監督になったのだと思われますか？それは、自分の創造力を発揮するためだったのか、それとも、自分の才能や可能性をコントロールできるようになるためだったのでしょうか？

メラニー・ロラン

実際、かなり早い段階から二つを並行してやっていました。コントロールしたかどうかはわかりません。私の性格から考えるとそうではないと思います。その一方で、とっても感動的だと今でも思うことは、自分のこの頭から物語が生まれ、周りにいる才能ある人たちを選び出し、その人たちが白紙のページを前に、私が一人で空想した小さなアイデアのために身を投じてくれるということです。映画は一人では作れない。決して作れません。私は最初に短編映画を撮った時からずっと同じ技術のチームと仕事をしています。長きにわたって一緒にいてくれるという忠誠心が心に響きます。だから、監督をやっていると、女優としてはあまり感じることはない気持ちですが、家を増築しているような気持ちになります。

リシャルル・ジャンリオ

2009年に『Les adoptés』を監督した頃に話を戻します。すでに女優として成功していた時期ですが、映画製作のために、プロデューサーに資金調達の依頼をするにあたって、ご自身が女性で、また女優である場合、それは簡単な話なのでしょうか？

メラニー・ロラン

18歳の時、アンヌ＝ソフィー・ブラズムの『Respire』という本を読んで、すぐに監督になりたいと考えるようになりました。でも誰も気に留めず、話も聞いてくれなかった。その後、『Les adoptés』を手がけましたが、長年キャスティング・ディレクターをしていたブルーノ・レヴィが、彼は私の両親の近所に住んでいたのですが、ある日、彼が私に「君は絶対に監督になるべきだ。君の最初の映画のプロデュースをするよ」と言ったんです。その時私は23歳でしたが、その言葉を聞かなければ、企画を手にも、誰かに会いに行こうとはしなかったと思います。かつて好きだったその本を思い出しながら、私は『Respire』の企画を持っていきました。もし、誰かに背中を押されなかったら、勇気を出して行動できなかったでしょう。

リシャルル・ジャンリオ

やはり女性が監督を務めるという道には落とし穴があるのでしょうか？

メラニー・ロラン

はい。私の経験ではありませんが、そう思います。でも同時に、フランスには、多くの素晴らしい女性監督がいるのだと自分に言い聞かせています。彼女たち自身が、監督業が大変なものだったと言っている印象はありません。アメリカでは前までほとんど不可能だったことで、女性監督の波みみたいなものが今来ているのだと思います。アメリカの友人たちを見ても、10年間苦勞していたのに、突然、あらゆる選択肢や企画にアクセスできるようになったのです。才能がありながら、日陰の存在で、大きな予算を得ることさえ望めなかった女性たちが、このように活躍できるのは、本当にうれしいことです。でも、男性と同じように予算を確保できているのでしょうか？いいえ。男性と同じ報酬を得ているのでしょうか？いいえ。アクション映画をこれから私が撮ろうとするとき、まわりは真剣にそれを捉えてくれるのでしょうか？いつもではありません。まだ道のりは続いています。

リシャルル・ジャンリオ

現時点のご自身のキャリアや知名度をもってしても、ということですね？

メラニー・ロラン

単に私が信頼されていないからなのか、それとも、アクション映画は元来、女性蔑視的なタイプの人が各役職のチーフを務めているだけなのか私には分かりません。バイクとか銃とかショットガンの世界です…そして、私は本当に何でも知っているようにふるまわないといけないのです。「わからない」と決して言わないことです。

リシャルル・ジャンリオ

映画界、特にフランス映画界では、世間で言われているほど女性差別が蔓延しているのでしょうか？

メラニー・ロラン

ひどい答えになりますが、私たちはこの女性差別に慣れきってしまっていて、もはやそれにすら気づいていないのではないのでしょうか。

リシャルル・ジャンリオ

どうやったら慣れずにすむのでしょうか？

メラニー・ロラン

それは生まれつきの性格も関係してくると思います。

リシャルル・ジャンリオ

ご自身はそうした性格ですか？

メラニー・ロラン

はい、でもそれだけで防げるわけではありません。長く複雑な議論になりますが、女性差別はどこにでも存在していて、そして常にあります。若いときにもあって、成功したときにもあって、あなたの意欲や自信のすべてを削ぎ落とそうとします。礼儀正しさや嫉妬の陰に隠れていることもあり、本当にどこにでもあるものなのです。だから問題は、私たちが生まれたときから、それはあって、でもそれと共に強くなって、突然気持ちが爆発して、「やめて」と言うことによって、男女の関係を逆転させられたのか、ということなんです。今なお、女性が苦しみ、色々と調整しながら新しい世界を作り出している最中なんです。多くの女性を置き去りにしていないだろうか、と私はよく思うのです。

リシャルル・ジャンリオ

あなたは「やめて」と言えた女性ですが、人の掟に従うことを、おそらく正確に拒否していることが、世間ではどう受け取られたのでしょうか？

メラニー・ロラン

私は「やめて」とは言いませんでした。ただ、自分の信念とフェミニズムから、この運動を支持しました。私たちは皆、同じようにフェミニストになる必要はありませんから。幸いにも私たちにはその権利があるので。むしろ、私たちに起きていることすべてを楽しんでいるという感じです。ただ思うのは、私たちはコロナが起きて最初に犠牲者となった女性たちを失望させてはいたらいだろうか、ということです。例えば、殴り殺され、家に閉じ込められた女性たちです。彼女たちのことについて十分に話したでしょうか。#MeToo 運動が爆発したとき、インドで 4 秒に 1 回レイプされている女性たちのことを話し続けましたか。レジの店員は皆同じ扱いを受けていたでしょうか。私たちがそうしたことにきちんと向き合ったかどうか疑問です。

リチャール・ジャノリオ

映画には社会を突き動かすような役割、社会的な役割があるでしょうか？

メラニー・ロラン

否定され、無意味なことをやらされたのが実情だと思います。マリリン・モンローのドキュメンタリーを先日観ました。ハリウッドの黄金期で、女優はまるで娼婦だった。映画に出たい女優は、ただ出演するにも、エージェントや監督と寝なければならなかった。他に選択肢はなかった。それが私たちの原点です。さらにさかのぼれば、魔女は植物について 3 つの小さなことを知っているという理由で火あぶりにされ、聖職者を悩ませていました。5,000 年にわたる抑圧の歴史があり、あらゆる事例があるのです。

リチャール・ジャノリオ

1950 年代のハリウッドのシステムとは、つまり女性は商品であるという話だと思います。このシステムは、ワインスタインの事件で、少し長引きました。今それが崩れ、新たな秩序が生まれましたが、あの時どんな思いでしたか？

メラニー・ロラン

当然ながらとても嬉しかったです。あのニュースが流れたとき、私は男性に囲まれた映画の撮影現場にいて、俳優では私だけが女性でした。男性の多い『オペレーション・フィナーレ』の現場でしたが、24 時間で一つの世界から別の世界へ行ったような、とても不思議な気持ちになりました。ランチが始まり、ニュースが流れ、撮影が終わっても、現場はショック状態でした。気分転換をして撮影を再開した役者もいますし、とにかく皆少なからず驚いていましたね。

リチャール・ジャノリオ

重苦しい雰囲気でしたか？

メラニー・ロラン

はい、とんでもない話を聞いたこともあります。いずれにしても、人の首を切らずに革命は起こせないのです。首を切られるべき人もそうではない人もいましたが、最終的に倒すべき相手をついに倒したのです。再調整には時間がかかります。被害妄想に陥らないようにするためです。私には被害妄想の時期がありました。「女性なら誰でもいいから、すべての女性にやみくもに様々な手段を与えるのは、能力がないことを露呈しただけ」一方で、男性、女性に限らず、小規模な映画製作の経験しかない場合、大作映画を手がけるのは容易ではありません。それは方法を知らないということではなく、方法を教わっていないということです。学ぶ機会がなかっただけです。

リチャール・ジャノリオ

少なくとも映画の世界では、男女の関係は大きく変わったと思いますか？ 不信感や自信のなさが増したり、逆に注目されたりすることもあるのでしょうか？

メラニー・ロラン

そうですね、リスペクトは増えたと思います。みんな少し恐れているのだと思います。わかりませんが。今でもなお、おかしなことが起きて驚くこともあります。そんな時、「この人、よく今日もやっつけられるな」と思ってしまう。

リチャール・ジャノリオ

例えばどういったことですか？

メラニー・ロラン

何も言えません。名前も何も言えませんが、ある女優が嫌がらせを受けている撮影現場に居合わせたことがあります。本当に限界を超えていました。ハラスメントはやってはいけないことだと誰もが知っているはずですが、1時間ちかく続きました。おかしいことです。だから私も抵抗を続けよう、と思いました。当時よりも多くの話を耳にする気がして、恐怖を感じることもあります。昔からずっとあった話だけど、明るみに出ていなかったのだと思います。なぜ女優たちはハーヴェイについて語らなかったのか。なぜ、お互いに何も言わなかったのだろうか。何年も沈黙していたなんて、どうかしています。

リシャルル・ジャンリオ

ハーヴェイ・ワインスタインの名前があがりましたが、アメリカでの経験について少しお話を伺いたと思います。きっかけは何だったのでしょうか？キャリアはどう継続しましたか？フランスとアメリカで、根本的な違いはありましたか？

メラニー・ロラン

私たちは通常 8 時間労働で、彼らは通常 16 時間労働です。一日が同じではないのです。私たちは 1 時間のお昼休憩をとりますが、彼らは違う。時間や仕事との向き合い方が違います。私はもともと、ある国から別の国へ行くのが好きです。カルチャーショックを感じられ、仕事への取り組み方が違う点も面白い。それから、まったく異なるエネルギーがそこにあります。実際、アメリカで撮影していると、フランスがものすごく恋しくなるし、フランスに長くいると、「アメリカで撮影するのが好きだ」と改めて感じるようになります。その両方ができるというのは本当に恵まれたことです。とても豊かな経験だと思います。フランスやアメリカだけでなく、私はさまざまな国から来た監督と撮影してきました。仕事を通して、旅ができ、国境を越え、どこか別の世界や設定、言葉で、物語を語り、そこに私の持っているフランス的な感覚を少し加えます...そして、英語で話す自由もあります。

リシャルル・ジャンリオ

先ほどからおっしゃっているように、アメリカの映画も撮られたんですね。アメリカでも同じような偏見を受けましたか？それともフランスにいた時よりアメリカの方が尊敬されましたか？

メラニー・ロラン

#MeToo 以前の話ですね。うまくいっていましたが、でも今回の撮影は、非常に複雑でした。実際、準備期間はたったの 10 日間で、撮影期間は 20 日で、複雑な気持ちになる瞬間がありました。ある時、突然私がキレてしまったわけではなく、何もかもがうまくいかないと感じることもありました。現場の監督と顔を合わせると、涙が出てきました。監督は私を見て、「夢の中でも泣いたらダメだよ！アメリカ映画なんだから、泣くなよ」と言いました。「でも、私は今泣きたい気分です」と。すると、「ありえないよ。他の女性監督のインタビューを読んでいないの？白黒はっきりつけて、弱音を吐いたりはいしないよ」と返されました。私は彼を見て言いました。「私にも弱音を吐く権利があります。限界を感じているのだから」と。私は涙を流しつつ、とにかく作品を完成させました。おかしいと思ったんです。私が女性監督で素晴らしいと思うのは、泣きながらも、泣いても仕方がないわ、と言うことです。なぜ、自分が他の誰かだと思わなければならないのでしょうか。

リシャルル・ジャンリオ

今おっしゃったことと関連するのですが、あなたの作品には女性が多く登場します。女性のヒロインや、女性の運命が描かれています。いわゆる「男性の視線」に対して、「女性の視線」とはどのようなものなのでしょうか？

メラニー・ロラン

それはアーティストによって異なると思います。リュクサンブール美術館で「先駆者たち」展を見に行きました。歴史から完全に忘れ去られた、まったく無名の女性の絵ばかりで、その女性画家たちによる女性に対する見方が、当時の画家たちが非常にロマンティックな女性像を持っていたのに対し、私は非常に暴力的だと感じて、魅了されました。私の作品では、何もすることが許されなかった当時の女性たちの姿を伝える、厳しくも強いものを見せました。今日は、何でもありという印象です。被写体の身体、女性の身体に入り込んで、ある種の暴力を見せようとする女性がいる一方で、極めて優しくありたいと思う女性もいるのです。女性の身体を撮る人は、決して男性のように撮れないと思いますが、女性監督の中にも、ほとんど男性的に女性を撮る人もいれば、ものすごく女性的な優しさで女性を撮る監督もたくさんいます。でも、自分の作品に出演する女優陣とうまく立ち回り、ある種の姉妹のような関係を築くことができると、自信を持って取り組めるようになって感じます。私の映画では、いつもそれを気にかけています。出演する女優たちやエキストラの方々との信頼です。『社会から虐げられた女たち』では、とても印象的な瞬間がありました。3週間を共にしたエキストラは全部で 35 人いて、私が全員キャスティングし、毎日会話を交わしました。本当の意味でのお付き合いができたと思います。ある日、入浴のシーンがありました。1880 年を舞台にした映画なので、当時のスポンジで身体を洗ったり、水を流したりするシーンです。私の中には、当時の名画のイメージがたくさんあって、絵画を実際に見せながらシーンの説明をしたかったほどです。そうしたものをなしに「ここは全裸のシーンで、身体を洗い合うの」と、説明するのは難しいことでした。このシーンを撮るために、気温が 5°C の中で裸になることに、出演者は少し反対でした。でも、私が説明をすると、撮影に 5 人の女性が必要なところ、25 人の女性が出たいと申し出てくれました。撮影は、男性の撮影監督ではなく、彼のアシスタントカメラマンの女性にお願いしました。全裸の女性が年齢問わず 15 人いて、撮影現場には女性しかいない。見つめ合い、触れ合い、洗い合い、私たちはカメラを持って同行し、みんなが涙を流していました。スタッフは、このように愛と友情にあふれた女性たちの姿を撮影して圧倒されてしまいました。

リチャール・ジャノリオ

『社会から虐げられた女たち』の話が出ましたが、この映画は、ご自身によるフェミニスト宣言と考えていいのでしょうか？ また、この映画は、「抑留された反抗的な女性たち」を主題にしていますが、今でも「厄介な女性”が見えない状況にあると思いますか？

メラニー・ロラン

私にとって最もフェミニスト的な作品は『欲望に溺れて』ですが、これは実はあまり評判がよくなかったですね。キャリアを続けるために子供を捨てた女性アーティストを描いた作品でしたから。#Me Too の後だったらまた違った受け止められ方をしたと思いますが。

リチャール・ジャノリオ

心を揺さぶる作品でしたか？

メラニー・ロラン

この映画は人々をある意味不安にさせました。彼女は悪い母親ではなかったけれど、自由を守りたい母親で、女性としての居場所を見つけれなくなった母親でした。きっと今なら扱ってもよいテーマなのだと思います。『社会から虐げられた女たち』はその逆でした。あまり声をかけられない時代に女性を題材にし、その後、どこから来たのかを思い出すために時代劇の映画を作りたいと思ったのです。現代では、家から引き剥がされて聖アンナに放り込まれることは少なくなったと思いますが、それでもヒステリックだと言われます。「おや、日付が合っていないのでは？」とそれでも作品に対して思うことがあります。おかしいことです。

リチャール・ジャリオ

撮影現場で、例えば男性監督からそのような話を聞いたことはありますか？

メラニー・ロラン

いいえ、でも、あまり気になりませんでした。若い頃はよくからかわれました。幼いころはよく怒鳴られたし、悪口も言われました。ある時、ただ「ノー」と言って楽屋に戻ることもできるんだ、ととてもシンプルなことを理解した瞬間がありました。誰も何もしてくれないとわかったとき、あなたにはその権利があります。怒ったり、対立したりするよりも、「私は怒鳴られるのが嫌だから、離れます」とただ言えばいいのです。実際、これはとてもよく効きます。大事にはならず、みんな肩を落として「そう」と呟くだけです。一度試したことがあります。すがりまくりました。その場ではっきりと「これから...ここに行って...終わったら...そこに行きますから」と言う感じです。

リチャール・ジャリオ

姉妹の絆(シスターフッド)の話があります。まだこの話を深くしていませんでしたね。シスターフッドは本当に存在すると思いますか？それともいわゆる流行りの言葉なのでしょうか？

メラニー・ロラン

確かに流行りの言葉ですが、本当にあると思います。女性が嫉妬深く、時に残酷であることもまた事実であるように。女性には、両方の側面があると思います。私が夢中になるのは、公園に行って、男の子と女の子が砂場で遊んでいる姿を見ることです。男の子と女の子を持つ私としては、その光景は魅力的です。それくらい、男女ではエネルギーが違うんです。魅力的な、遊び場です。小さな女の子たちは集まってお城を作ります。男の子たちは組織を作って、戦争ごっこをして闘いたがります。もちろん、喧嘩をしたがる女の子と、砂のお城を作りたい男の子がいるように、それは混ざり合っているのですが、それでも私の娘は小さなドレスが描かれた本を手に取り、一方で息子はソファに飛び乗っています。

リチャール・ジャリオ

息子さんや娘さんにもそう教えているのでしょうか？

メラニー・ロラン

全然同じようには育てていません。ひどい話ですね。娘には、もっともっと対処法を学んでほしい。彼女のためでもあるんだけど、もっと息子を守らないといけないとも考えていて。つまり、私たちはフェミニストでいると同時に、すでに息子たちをそうやって育てている...

リチャール・ジャリオ

娘さんを強くさせたいとお考えですか？

メラニー・ロラン

始められたらすぐにでも武道をやらせたいと思っています。今はまだとても小さいですが、路上でもし何かあったら素手で身を守り、場合によっては殺せるようにしたいです(笑)とにかく、「できる」ということを知ること。ただ道を歩くだけ...というのは、私たちにとって恐ろしいことです。私たち女性は強くて、色々なことに耐えることができる、と考えられる一方で、女性であることの恐怖を日常的に受け入れることは難しいのです。

リチャール・ジャリオ

あなたの人生やキャリアの中で、男性の前で無力感を感じた瞬間はありましたか？

メラニー・ロラン

そうですね、誰とは言いませんが、はっきりと覚えています。その人に大声を上げられ、私の心は完全に折れてしまいました。

リシャルル・ジャノリオ

映画界の人ですか？

メラニー・ロラン

そうです。「主役なんていくらでもいる！」と私に叫んだ人です。

リシャルル・ジャノリオ

残念ですが、時間が残りわずかとなりました。もうひとつの問題でもあるエコロジーについてもお話したいと思います。フェミニズムとエコロジーの架け橋となりうるものは何でしょうか？

メラニー・ロラン

“エコフェミニズム”です。

リシャルル・ジャノリオ

教えてください。

メラニー・ロラン

“エコフェミニズム”は素晴らしい考え方です。“エコフェミニズム”のいいところは、政治的な理想を求めるのではなく、エコロジーの危機や男女の関係について語りたいたいという思いがあることです。冷戦下の 1980 年代に登場した運動で、女性たちが原発反対の街頭活動を始め、「私たちが女性を苦しめているように、地球も苦しめている、私たちが地球にしている抑圧は、母親にしている抑圧と同じだ」と突然言い出したんです。実際、革命的な運動であり、非常に強く、美しいものでしたが、少しずつ消失してしまいました。今、エコロジーやフェミニズムについて語られることが多いですが、“エコフェミニズム”についてはほとんど語られていません。今少しずつ話していますが、それこそ「いつになったらもっと女性を権力者にするのか、いつになったら何もなくなるのか？素晴らしいことをやっている人たちがいて、同時に、この世界を変えたい、好転させたいと思う人が十分にいるのだろうか」と。エコロジーやフェミニズムにおいて、実はとてももどかしいのは、私たちが物事を認識するまでに長い時間がかかったということなのです。5,000 年にわたる抑圧からすると、私たちにとってはまだ始まったばかりの小さな革命です。私たちは 5,000 年間、地球を破壊し続けてきました。「一体どうやって余分な 5 度を管理するつもり？」と一種の驚きを感じているのですが、とにかく遅いんです。

リシャルル・ジャノリオ

男性よりも女性の方が内部告発は上手だと思いますか？

メラニー・ロラン

ええ、でも、だから聞かないんです。

リシャルル・ジャノリオ

女性は話を聞いてもらえないのでしょうか？

メラニー・ロラン

改めて考えてみると、この 2 年間で女性は少しずつ話を聞いてもらえるようになりました。いいえ、女性は聞く耳を持ちません。女性は何かを知ると燃えるものです。それが私たちの原点です。聖職者はよく言いました。「知っている女は危険な女だ」と。

リシャルル・ジャリオ

2022 年でもそうなのでしょうか？

メラニー・ロラン

今も間違いなくそうです！

リシャルル・ジャリオ

最後に、観客の皆さんに質問をさせてください。現在、登場人物が全員女性のアクション映画を準備されていると思いますが、これはフェミニスト的な映画だと思います。もう少し詳しく教えてください。

メラニー・ロラン

私は敢えてフェミニストな映画を撮っているわけではなく、女性を撮るのが好きだけです。最近起こった様々な出来事も影響して、これまで男性が多く登場する大作映画でも、男性を女性に置き換えて作品が作られることも増えましたが、そうしたアクション映画に登場する女性は、例えばミニスカートで、大きな窓を壊しながら登場し、しばしばロシアンマフィアを殺して...というのが好まれる印象があります。私が作りたいたくアクション映画では、ヘリコプターから飛び降りながらも、食べたり、飲んだり、煙草を吸ったり、笑ったり、抱き合ったり、ソファで寝たりする、そんな姿を見せたいのです。アクション映画に登場する女性は、すでに男性の絶対的なファンタジーから生まれる印象がありますね。非現実的な女性で、ディナージャケットのポケットには常に手榴弾が入っていて、行く手を阻むものはすべて殺し、しばしばとても冷たく、不吉な存在であると思います。手榴弾を投げることができる女性も見てみたいとも思いますが。

リシャルル・ジャリオ

アクション映画のジェンダー解放、それを望んでいますか？

メラニー・ロラン

女性として、そういう映画を作る機会を与えられたら、女性のアクション映画を作りたい、と常々思っていました。男性のアクション映画を作ろうとは思っていません。

リシャルル・ジャリオ

なるほど、ありがとうございました。会場の皆さんから何かご質問はありますか？

記者

こんにちは。環境への取り組みについての質問ですが、もう少し詳しく教えてください。また、2 つ目の質問ですが、これまでまだやったことのないことで実現させたい夢はありますか？

メラニー・ロラン

ご質問ありがとうございます。人間がいなくならないように取り組む、というのは、自分でもすごく不思議なんです。不思議ですよ。世界を変えたい、生きやすくしたいという思いで、誰もが力を注がなくてはならない、そして時間がないので、少し急がなくてはならない、と感じます。このことに一生を捧げる映画人が少ないことがとても不思議です。10 年前にドキュメンタリーを作ったとき、冒頭に「10 年後はマッドマックス

だ」と書きました。もう 10 年が経ちました。とにかく少しずつ、そこからスタートしました。みんなを落ち込ませたくはないのですが、水がない、水位が上がっている、氷山がほとんど残っていない...といった話をすると、もう後がない、ということになりますね。私たちには、素晴らしい解決策があるにもかかわらず、誰も問題を乗り越えることができないのです。ロビー団体が世界を支配しています。このテーマで作られた映画は非常に限られているのです。私は昨年、審査員をしましたが、大きな不満を感じました。森林破壊や気候について語らないのはおかしい、夢を持たせるだけ、前進するためだけにフィクションを作るのはおかしい、と。映画にはとても強い力があります。何でもうまくいくようなフィクション映画に人々を投影させたり、「みんなどうせ死ぬんだ」というような映画ばかり作ってはいけません。現実とは違って、だからそうした行為はナンセンスです。もしかしたら、10 年後を想定して、「こうしたらいいんじゃないか、こうしたら逃げられるんじゃないか」という、参考映画みたいなものが実現できるかもしれませんね。そうです。そうした役を私は担いたいと思います。

リチャール・ジャンリオ

もう 1 つ質問をお願いします。

記者

今お話にあったように、昨年は審査員も務めましたね。スパイク・リーが審査員長になって、いかがでしたか。

メラニー・ロラン

10 日間にわたって、色々ありました。審査の最後までたどり着いた時、審査員全員に感動が一斉に走ったと思います。すべての作品を見るのはとても大変な作業で、必ずしも全員が同意できるわけではなく、千差万別の感情が交差します。会場の階段の一番下で全員が揃い、お互いに顔を見合わせたとき、大きな感動を覚えました。この映画祭には、そういうものがあります。この気持ちの高まりには、言いようのない魔力があります。階段を上る前に、一種の感情の高まりがあるのですが、これが本当にすごいのです。この感情と同じものを引き出してくれるお祭りが他にあるのでしょうか。国籍も違えば、性格も違う人が 10 日間を共にし、世界中から人が集まってくるこの映画祭に立ち会って、この職業について討論できるというのは本当にラッキーだと感じました。

リチャール・ジャンリオ

また、レッドカーペットでタランティーノと喜びを分かち合ったことも記憶に新しいですね。

メラニー・ロラン

思い返すと、人生最悪の瞬間になったかもしれないあの瞬間が、実は人生最高の瞬間でした。実は転びそうになったんです。14 センチ以上のヒールを履いていましたが、彼と踊っていました。すると足元でカチッと音がして、「あれ、おかしいな、滑走路から飛び立つフライトの最中だったかしら」と思いました。

リチャール・ジャンリオ

もう 1 つ質問を頂いています。

SNS の質問で、Instagram でオランプさんからのご質問です。ご自身にとって、映画上のヒロインは誰ですか？

メラニー・ロラン

カトリーヌ・ドヌーヴが出演したジャック・ドゥミ監督の『ロバと王女』で彼女が身に着けていたような太陽の色のドレス、時間の色のドレス...そんな色のドレスを着る女優になりたいと夢見ていました。だから、カン

又に来られたことを嬉しく思います。小さい頃、カトリーヌ・ドヌーヴになりたかったんです。カトリーヌ・ドヌーヴにはなれなかったけれど、映画はずっと観ていました。VHS テープで、テープが傷つくまで。それから、タランティーノの『キル・ビル』に出てくるベアトリクス・キドーです。『ロバと王女』とは真逆ですが、彼女は本当の戦士で、でもただそれだけではなく、何にでも復讐していきんです。最も美しいと感じたシーンは、多くの暴力を経てきた彼女が娘を見つけるシーンです。バスルームで、胎児のような体勢で、喜びの嗚咽をこらえる、あのシーンです。

リチャール・ジャノリオ

最後に、同じく Instagram のマリオンさんからのご質問です。若手女優だった頃に受けたアドバイスで、今でも活かされているものはありますか？

メラニー・ロラン

はい、あります。そのアドバイスは、一番応用が利きました。14 歳の時、ドパルデューが私に言った「僕はドパルデューの真似をしているんだ」という一言です。それが心に残りました。確かに、自分が何を表現するのか、少し怖くなると、自分のありのままの姿を見せられるようになりますね。自分が何者であるかをあまり恐れないと、人生はうまくいくものです。他人のふりをすることも少なくなると、心が落ち着きます。

リチャール・ジャノリオ

あなたは今、周りの意見や批判といったものすべてを無視することができますか？

メラニー・ロラン

アンジェリーナ・ジョリーなら「そんなこと、本当は何でもないことなのよ」と言うでしょうね。

リチャール・ジャノリオ

とても素敵な結論ですね。皆さん、「ウーマン・イン・モーション」トークにお付き合いいただき、どうもありがとうございました。メラニー・ロランさん、ありがとうございます。